

観音菩薩の宗教 ⑩

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

女尊ターラー菩薩の信仰

これまで観音菩薩が多様な権化に姿を変えることとや、十一面観音などの変化観音について述べてきた。今回は、観音菩薩がターラーと呼ばれる女性の菩薩を産み出し、その菩薩がインドで始まりチベットやモンゴルで高い人気を博したことを見てみたい。いわば創造神としての観音菩薩と、その慈悲の思想を継いだ菩薩についての考察である。

ターラー菩薩の起源は観音菩薩の慈悲である。慈悲とは他者に共感・同情を持ち、さらに他者を助け出そうとする心をいう。その意味でターラー・ラマが慈悲を英語でコンパッションと表現しているのは正確である。コンパッ

ションの語源は、共に(コム)苦しむこと(パッション)だからである。衆生は四苦八苦をはじめとする心身の悩みを持ち、それを知った観音菩薩は衆生と心を共にして悲しむ。その時の観音菩薩の涙から生まれたのがターラー菩薩とされる。つまり、大きな救済力を持つ観音菩薩ですら救いきれなかった衆生も残らず救済するのがターラーであり、この信仰はインドで始まった。ことにインド密教では仏と同格の地位にある仏母という女性の尊格が生まれ、ターラーはその典型として尊崇されてきた(田中公明「チベットの仏たち」方丈堂出版)。

ターラー菩薩がチベットの仏たると、さらに大きな人気を博するようになった。チベットの僧侶が最もよく唱える偈のひとつであるチベット語訳の「二十一ターラーへの讃」やその注釈には、このことが述べられている。それによれば、衆生の苦しみを見た観音菩薩は涙を流し、その涙は顔を伝わって大きな池となった。その池の深みからウトハラという青い蓮華が咲き、その蓮華の上に光り輝く十六歳の美少女が現れた。彼女がターラーである。



現代モンゴルで描かれた七眼の白ターラー菩薩(中央)と二尊の眷族を従える。筆者蔵。

ターラーは観音菩薩を慰め、衆生救済のために協力すると語った。この説がチベットに伝わると、観音菩薩は二滴の涙を流し、左目からの涙が緑のターラーに、右目からの涙が白いターラーに交じたとされた(Wilson "In Praise of Tara: Songs to the Saviouress", Wisdom Publications, London)。

ターラーは観音菩薩と同じく、八つの怖れなどのあらゆる苦難から衆生を救ってくださるとされ、衆生が「オーム・ターラー・トゥッターレー・トゥレー・スヴァアーハー」という真言を唱え、その声を聞くやいなや救いの手をさしのべる。この真言は「唵唯多羅尊よ。唯多羅尊よ。唵。娑嚩訶」などと和訳されている(田久保周啓「真言陀羅尼蔵の解説」鹿野苑ルビは筆者)。ここに見える唵(オーム)も娑嚩訶(スヴァアーハー)もインドの聖なる音で、唱えることに功德があるが翻訳することはできない。

チベットのダライ・ラマ二世(ゲンドウ・ドゥブ)は、「このマントラ(真言)を唱えれば頭を切り落とされても生き続け、身体が肉がばらばらに切り裂かれても死なない」と述べている(Beyer "The Cult of Tara", University of California Press)。チベットでは多様なターラー菩薩像が作成されたが、なかでも白ターラーと緑ターラーは最もよく弘まった。前者は延命長寿などの息災に、後者は利殖蓄財などの増益に効験ありとされている(田中前掲書)。

日本を含む漢字仏教圏において、ターラーはチベットやモンゴルほどの広まりを見せなかったが、ターラーに関する漢訳仏典も複数伝存する。それらにおいてターラーは多羅菩薩とか多羅観音と音写され、また瞳を意味する瞳子とか妙目精と訳された。そこではターラーは観音の涙ではなく、観

音の眼から放たれた光明から生じたとされている。たとえば、「仏説大方広曼殊室利經」(別名「観自在多羅菩薩儀軌經」)には、ターラー菩薩について、観自在菩薩摩訶薩が右の目の瞳から「大光明を放つ」と「光に随って流出して妙女形を現じ、衆生を憐愍すること慈母の如し」と説かれている。(佐藤任「密教の神々」平凡社ライブラリー)。

ターラーが「眼」と関係が深いのは、その尊名の語源からも明らかである。サンスクリット語のターラーの男性形ターラは第一に「星」や「惑星」を意味する。この語は語源的には英語のスター(star)とも関係があると考え、代表的な辞書にはラテン語で星を意味するアストルム(astrum)と同系とされ、Sjo (T.W.Rhys Davids & William Stede "The Pali Text Society's Pāli-English Dictionary", London)。やうにそこか

ら「眼の瞳」の意味が派生した。菩薩としてのターラーは、瞳が衆生を見て救済するとされるようになったとも考えられる。一方、ダルマチャリ・プルナというニュージージーランドの仏教学者は、ターラーの語源は「横切る」を意味するトリという動詞であるとし、そこから向こう岸に渡すすなわち「救済する」の意味になったと考へている(Dharmachari Purna "Tara: Her Origins and Development", http://www.westernbuddhistreview.com/vol2/tara_origins_a_development.html)。

チベットの歴史は仏教史とともに記述されてきたが、ターラー菩薩と古代のチベットも密接な関係を持つている。チベット最初の王朝はソツェンガンポ王によって西暦五八〇年に建てられた。その前年、チベットの東では長安を都として隋が建国され、日本では幼き聖徳太子が活躍を始

めた時代である。隋はまもなく滅び、替わって同じ長安を都として唐が出現した。ソツェンガンポ王は唐から詩書などの学問を輸入するとともに、外交上、唐に遣いを送って嫁として公主を求めた。公主とは皇帝の姫君のことをいう。唐にとつてチベットの申し出を受諾することは屈辱だったが、チベットの軍事的圧力に屈して、ついに太宗皇帝は養女の文成公主を送ることになった。文成公主ははじめソツェンガンポの王子の妻となり、王子逝去の後にはソツェンガンポと再婚した。公主の嫁入りは政略結婚だったが夫妻は仲良く、またチベットと唐の文化の掛け橋ともなった。ソツェンガンポ王はまた、ネパールからもティツンという后を迎え、このふたりの女性からチベットに漢仏教とインド

仏教が輸入された。そうした背景の下、後世、

ソツェンガンポ王は観音の、文成公主は白ターラーの、ティツンは緑ターラーの化身と考えられるようになった。

先に触れた「二十一ターラーへの讃」は、ターラー菩薩を二十一の詩文で讃えたものだったが、チベットではのちにそれぞれ別の讃ごとに二十一のターラーの画像が生み出された。日本の仏像と異なり、チベットやモンゴルでは仏菩薩が固有の肌色をもつて作成されることが多い。なかでも白ターラーと緑ターラーは広く知られている。通例、白ターラーが結跏趺坐なのにに対し、緑ターラーは右足を台座から降ろして座している。それは、より早く衆生のもとに駆けつけるためと信じられている。「聖者多羅尊、(中略)中年女人の状にして、合掌して青蓮を持」つという記述もあるが(「大日経」具縁品)、チベット・モンゴルでは若い女性の形像が一般である。